

掛川市・袋井市 新病院建設だより



June 2011 Vol.8

東日本大震災により被災された皆さまと
そのご家族の皆さまには心よりお見舞い申し上げます。
被災地の一日も早い復興をお祈りしております。

掛川市・袋井市新病院建設事務組合
管理者 袋井市長 原田英之
副管理者 掛川市長 松井三郎

災害に強い病院に

24時間365日の医療継続に対応する災害拠点病院

■電力引込の多重化
敷地外からの電力を2回線引き込み、一方が切断されても電気が途切れないようにします。

2回線
電気室

■自家発電装置の設置
万一、電気の供給が停止した場合は自家発電に切り替えます。

■ヘリポートの設置
ドクターヘリの離着陸用にヘリポートを設置します。ヘリポートは物資の供給にも活用します。

ヘリポート

新病院は、災害拠点病院として、想定される東海地震などの災害時に病院としての機能が継続できるよう、建物の安全性を強化し、医療機能の確保に努めます。

病院の機能を継続させるための具体的な方策



■トリアージスペースの確保
玄関横の屋根付き部分にトリアージスペースを確保します。
※トリアージとは、多数の負傷者が出たときに、重傷度と緊急性により治療の優先順位をつける方法をいいます。

トリアージスペース
1階

■処置スペースの増強
1階ホスピタルモール（広い廊下）を処置スペースに転用します。

ホスピタルモール
1階

■入院ベッドの増床
災害時には500床を800床程度に増やせるようにします。リハビリ部門を病室に転用（3階）

4~6階
4床の病室にベッドを増床

「免震構造」の採用

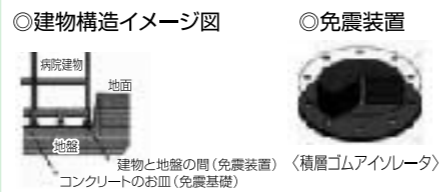


◎震度7を記録した新潟県中越地震では、免震建物の揺れが約4分の1に減らされたことが実証されています。

免震構造とは、地盤の上にコンクリートのお皿を設けて、建物の柱の真下と地盤の間に免震装置を組み込んだ構造をいいます。

これにより、地震が発生した場合、免震構造でない建物に比べて、建物の横揺れを約4分の1に、建物の変形も約6分の1に減らすことができます。

写真の免震装置は、「積層ゴムアイソレータ」という種類の免震装置です。この装置は、地震の揺れが建物に伝わらないように縁を切る「絶縁機能」、地震の揺れを受けても常に安定して建物の重量を支える「支持機能」、地震後に建物が元の位置に戻るための「復元機能」を有しています。その他の免震装置として、「直動滑り支承」、「鋼材ダンパー」

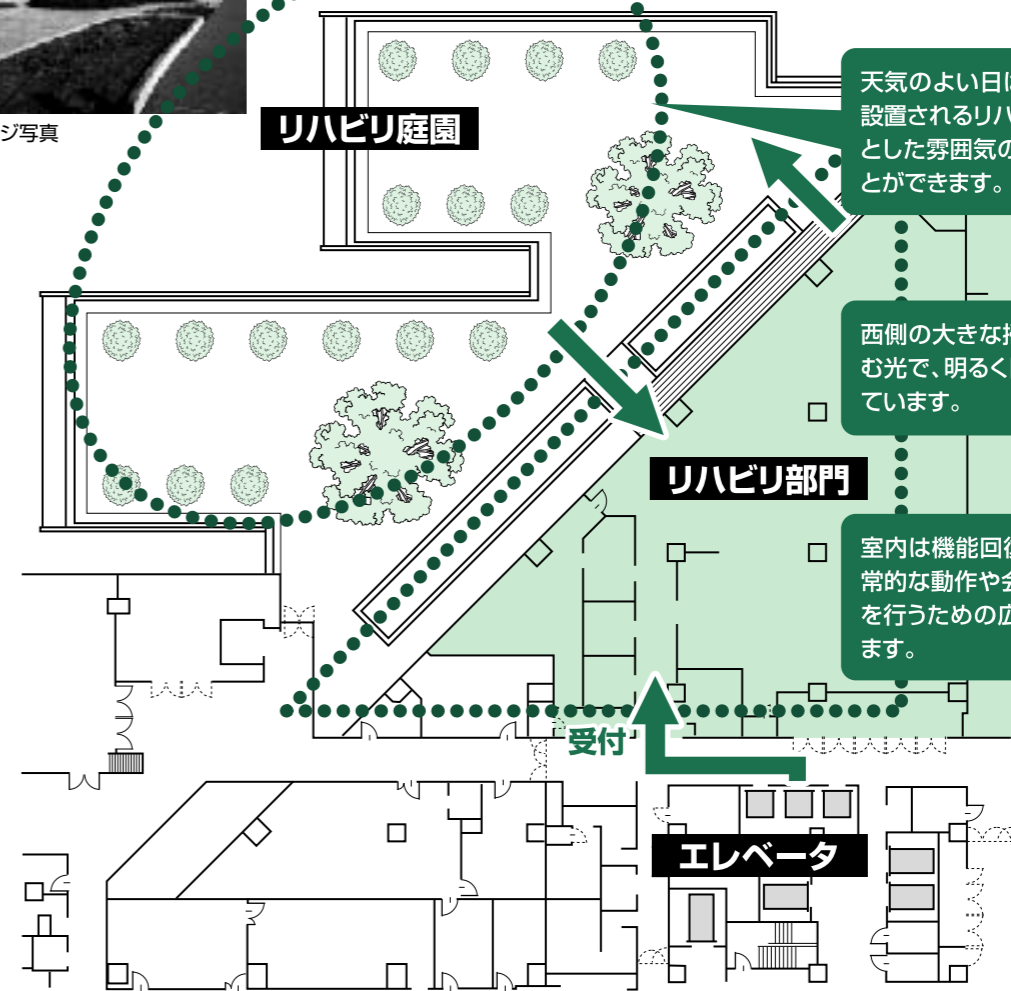


及び「オイルダンパー」を採用しています。これらの免震装置をバランス良く建物の下へ配置して、巨大地震が発生しても、病院機能が維持できるように病院全体の構造設計を行っています。

新病院設計のポイント ~⑤リハビリ~



今回は、リハビリ部門についてご案内します。
新病院では、患者さんの早期治療と早期の退院を目指して、主に入院中に行う急性期リハビリを充実させます。



天気の良い日は、外来部門の屋上に設置されるリハビリ庭園で、のびのびとした雰囲気の中、リハビリを行うことができます。

西側の大きな掃き出し窓から差し込む光で、明るく開放的なつくりとなっています。

室内は機能回復のための運動や、日常的な動作や会話を可能とする訓練を行うための広いスペースを確保します。

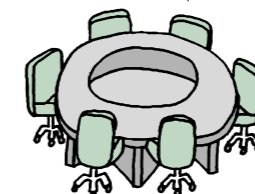
組合議会 平成23年第1回組合議会定例会



- 開催日 平成23年2月23日
- 議決内容
 - (1) 平成22年度組合会計補正予算(第2号) 20,770千円の減額(実施設計委託料の減額ほか)
 - (2) 組合職員定数条例の一部改正 組合事務局職員数11人から15人へ
 - (3) 平成23年度組合会計予算 予算総額 3,248,850千円



【主な内容】		歳入	市負担金	183,849千円
		うち掛川市	110,474千円	
		袋井市	73,375千円	
		組合債	3,065,000千円	
歳出	建築工事費(部分払)	2,970,000千円		
	工事監理業務委託	95,000千円		
	運営システム計画等策定業務委託	28,000千円		



掛川市・袋井市新病院建設事務組合

〒436-0043 掛川市大池2798番地の11(掛川市勤労者福祉会館内)
TEL.0537-61-2700 FAX.0537-61-2701
ホームページアドレス <http://www.shinbyoinkyogi.jp>
Eメールアドレス byoken@city.kakegawa.shizuoka.jp

平成23年6月1日発行

この広報紙は資源リサイクル推進のため、再生紙を利用しています。

市民説明会を開催しました

3月13日に月見の里学遊館(袋井市)で、3月16日には掛川市生涯学習センターで、新病院建設に関する市民説明会を開催しました。

まず、本年3月に完了した建物の設計概要や現在両病院職員により検討が行われている運営計画について、イメージ図などを用いて説明しました。



次に、基調講演と地域医療の取り組みに対する報告が行われました。会場には両



日で450人の方が来場し、新病院建設への関心の高さがうかがえました。

●基調講演



松尾 清一 氏
(名古屋大学医学部
附属病院長)

「昨今の医療情勢と新病院への期待」

日本では世界的に見ても人口当たりの医師や看護師の数が非常に少ないが、一方で病床数が圧倒的に多い状況にあります。つまり、病院がたくさんあることで、人手が分散されているため、なかなか効率の良い医療ができず、医師や看護師にはかなりの負担がかかっています。

また、昨今は開業をする医師が増えて、病院に勤務する医師が減っているため、病院勤務医は毎日12時間以上働くことも珍しくありません。このような状況の中、いかに効率よく医師を配置して医療のレベルを落とさないようにするかが大事になります。地域の医療は、病院、地域

の医師会、医師を派遣する大学、自治体、地域住民により成り立っています。

地域住民には、地域医療を地域全体で支えるという意識を持って、どういった行動をとるべきかを考えていただきたいと思います。

新病院が磐田市立総合病院とともに中東遠地域の中枢病院としてその機能を發揮できるよう、名古屋大学と浜松医科大学が協力・連携し、医師の確保について継続的に支援していきます。

全国的にも先駆的で画期的なこの病院統合を必ず成功させたいと思っています。



寺尾 俊彦 氏
(浜松医科大学前学長)

「地域医療を守る」

日本では診療科の格差、地域の医療格差、医師数の格差が問題となっています。診療科においては、産婦人科や外科の医師が減り、精神科や皮膚科の医師が増えるなどバランスが悪くなっています。

地域別に見ると、東京では医師が増えているのに、東北地方では医師が減っています。このため、地域によって人口当たりの医師数に格差ができています。

中東遠地域でも医師不足は非常に問題で、それが病院を経営難に陥らせ、医療崩壊を起こす寸前でした。今回、掛川病院と袋井病院が統合し、機能を集約することで急性期医療を担えるわけです。

そして、国が定めている4疾病(脳卒中、心筋梗塞、がん、糖尿病)5事業(救急医療、災害医療、周産期医療、小児医療、へき地医療)を、中東遠地域のもう一つの基幹病院である磐田市立総合病院と互いに支えあいながら、分担してやっていくこととなりました。

このように日本で初めて大きな市立病院が統合し連携して医療を支えることは、非常に意義があり素晴らしいことだと思います。

新病院が高度医療を提供するだけでなく、職員が親切で優しく、患者さんにとって癒され、信頼でき、地域住民に望まれる病院となることを確信しています。

●活動報告

掛川市、袋井市でそれぞれ地域医療を守るために活動している団体から、活動報告がされました。



f.a.n.地域医療を育む会
会長(掛川市)
武田 和子 氏

中東遠地域における医療は深刻な状況です。特に医師不足は深刻で、一地域だけで解決できる問題ではありません。誰もが安心できるより良い市民生活のため、自身の問題として捉え、考えなければならぬ時期に来ていると思います。

f.a.n.はお茶の防霜ファンのように、新しい芽を守り育て成長していきける会になれるよう活動しています。

現在、情報紙を7号まで発行し、市内数か所に配布しています。情報紙には、新病院がどうなるのか、医療の行方はどうなるのか、掛川病院の現状や医療者の思いなどを掲載しています。

また、講演会への参加や学習会を通して、情報を収集しています。

私たちは、市民とともにできる活動として、「かかりつけ医を持つこと」、「救急車をむ



NPO法人プライツ
理事長(袋井市)
村田 朝子 氏

やみに利用しないこと」、「コンプレックスを減らすこと」、「感謝の気持ちを表すこと」、「お互いさまの輪を広げる」という活動宣言をしています。私は、報徳の心があり、思いやりのある市民がいて、すばらしい自然や農産物の豊かなこの街が大好きです。

大好きなこの街が、医療、介護、福祉において、子供たちが安心して育つていける街になるために、一人が100歩進むのではなく、一人一人ができることを一歩ずつ、つながりの心や思いやりの心を大切に活動していきたいと思っています。

お問い合わせ先(武田)

0900486663015



私たちは、子供たちに安心できる地域医療を残すため、また自分の健康と命を守るために、「地域医療を守る一人一人の心がけ」をスローガンに5つの心がけを伝える活動をしています。

1つ目は「かかりつけ医を持つこと」です。
2つ目は「コンプレックスを減らすこと」です。
3つ目は「救急車をタクシー代わりに使うのをやめよう」です。

救急車を利用した患者さんのうち、医師が救急と思わなかった件数が約60%あったそうです。

このような利用を続けてい

ると、本当に命に関わる方へ向かっただけで済みます。

4つ目は「お医者さんへの感謝の気持ちをもちよう」です。

過酷な労働環境の中働いているお医者さんに対し感謝の気持ちを伝えましょう。医師や看護師が生かがいを感じる時は、患者さんからの感謝の言葉をかけられたときというアンケート結果もあります。

5つ目に、地域医療の実情を知っていただくため、「しゃべり場救急座談会」を開催しています。

出前座談会も行いますので、お気軽にご連絡ください。

NPO法人プライツ連絡先

0538444712



●来場者からの質問

市民説明会において、来場者の皆さんからいただいたご質問を一部紹介します。



Q1 災害が起きた場合、どのくらい患者さんを収容できますか。

A1 1階のホスピタルモールという広い廊下や3階のリハビリ室に簡易ベッド等を設置することで、最大800床程度収容することができそうです。

Q2 病院スタッフを集めるための工夫はありますか。

A2 一つは現在の病院で働いているスタッフに新病院の重要性を認識してもらいたいことです。

もう一つは病院の勤務環境を整え、新たに新病院で働きたいと思う方を増やすことです。

Q3 遠州の空(風)西(風)には、どのように対応しますか。

A3 病院への入り口は、正面玄関をはじめ、時間外入口、救急入口などすべて東側から入るつくりになっています。